

# 講演「国境を越えて」



国境なき医師団日本会長 寺田朗子氏

るニュースレターの翻訳の確認を依頼され、その内容を読んだ時からでした。タイ、カンボジアの国境付近で祖母と母に連れられてきた、スカート首まで上げている7才位の女の子がいました。医者がスカートを下ろしてみたとき絶句しました。それは爆撃で腸が飛び出し、医療機関がないので母親がビニール袋をきれいに洗い、そこに腸を入れ身体にぶら下げて4年間生きてきたとのことでした。医者は直ちに麻酔医と外科医を呼び寄せ修復手術を施しました。その後女の子は無事生きているそうです。

女性部会では昨年の「チャリティーボウリング大会」の収益金の半分を「国境なき医師団」に寄付しました。そこで今年の総会にはこの寄付金がどのように活かされているか聞きたいという声が上がリ、講師には同団会長の寺田朗子氏をお招きしました。

同医師団は世界18カ国に拠点があり、本部は置かず各々が国際憲章に基づいた活動を独立して行い、緩やかなネットワークで結ばれています。このうち、フランス、ベルギー、オランダ、スイス、スペインの5カ所にオペレーション支部があり医師団を編成し24時間以内に派遣しています。年間約3,000人のボランティアが世界80カ国で援助活動を続けています。

国境なき医師団は1971年にフランス人医師のグループにより創設されました。ピアフラや東パキスタンへの国際援助活動に参加した彼等は既存の援助方法には限界を感じ、新しい手法の援助団体の創設に至りました。

1999年にこの活動が認められ、ノーベル平和賞が授与されました。派遣ボランティアは医師、助産婦、看護婦、ロジスティシアン（物資調達要員）、アドミニストレーター（連絡、調整員）など専門家で英語かフランス語ができ、原則として6ヶ月以上参加できるというのが条件です。ここで問題になるのは6ヶ月国内の職場を離れ、帰ってきたとき、もう職場に席が無いということです。フランスではもとの職場に復帰することが保証されているそうです。活動中に命を落とすこともあります。

天災、人災、紛争などあらゆる災害に苦しむ人種、宗教、思想、政治すべてを超えて差別することなく援助する。タイ、カンボジアの内戦下の難民援助やアフガニスタン初期の戦時下での活動などが、フランスのメディア、広告会社を取り上げ、世界に報道されるようになり、資金も集まるようになりました。

提供資金の72%は現地活動費、6%が運営費、22%が募金活動費に当てられています。ビデオを交えて様々な活動内容を話して頂きました。日本では不況とは言え、暖衣飽食、ダイエットが悩みという人も多くいます。私達は安全な所に住み、懐の痛まないお金を少し寄付しただけで、資金の使い方を話して下さいなどおこがましい限りです。この講演を機会にこの現実を目のあたりにして、何をすべきかを考えるターニングポイント（転換点）になればと切に思いました。

地下に埋蔵されている鉱物資源をめぐる、紛争が起こり、相手の戦力を弱めるため、銃を持ってないように手首を切り落とし、又、動けないように足首を切り落とすなど、言語に絶する戦いが繰り返されています。

人間は全て、生れながらに健康を享受する権利を持っています。しかしこの当然の権利はすべての社会に保証されているわけではありません。世界の片隅で貧しいままに忘れられた人々、紛争の中の当事者の利益にならないという理由で見捨てられた人々が多くいます。

寺田さんが、この活動にのめり込むきっかけは、あ

（女性部会 舟木記）